

農民とともに

No. **114**
2002年8月31日



JA長野厚生連佐久総合病院ニュース

〒384-0301 南佐久郡白田町大字白田197番地
☎(0267)82-3131 FAX(0267)82-9638

URL <http://www.valley.ne.jp/~sakuchp/>

発行責任者 清水茂文



若月賞授賞式

写真 「農村医学夏季大学講座で第11回若月賞を受賞する中村哲先生（7・26）」 撮影・三石敏郎

目次

第42回農村医学夏季大学講座

若月賞受賞記念講演

「国際医療協力の18年」…………… 2

衛生指導員ものがたり…………… 22

人の道はそれぞれ…………… 24

安全文化を育てよう…………… 25

いんふおめーしょん…………… 26

時々刻々…………… 28

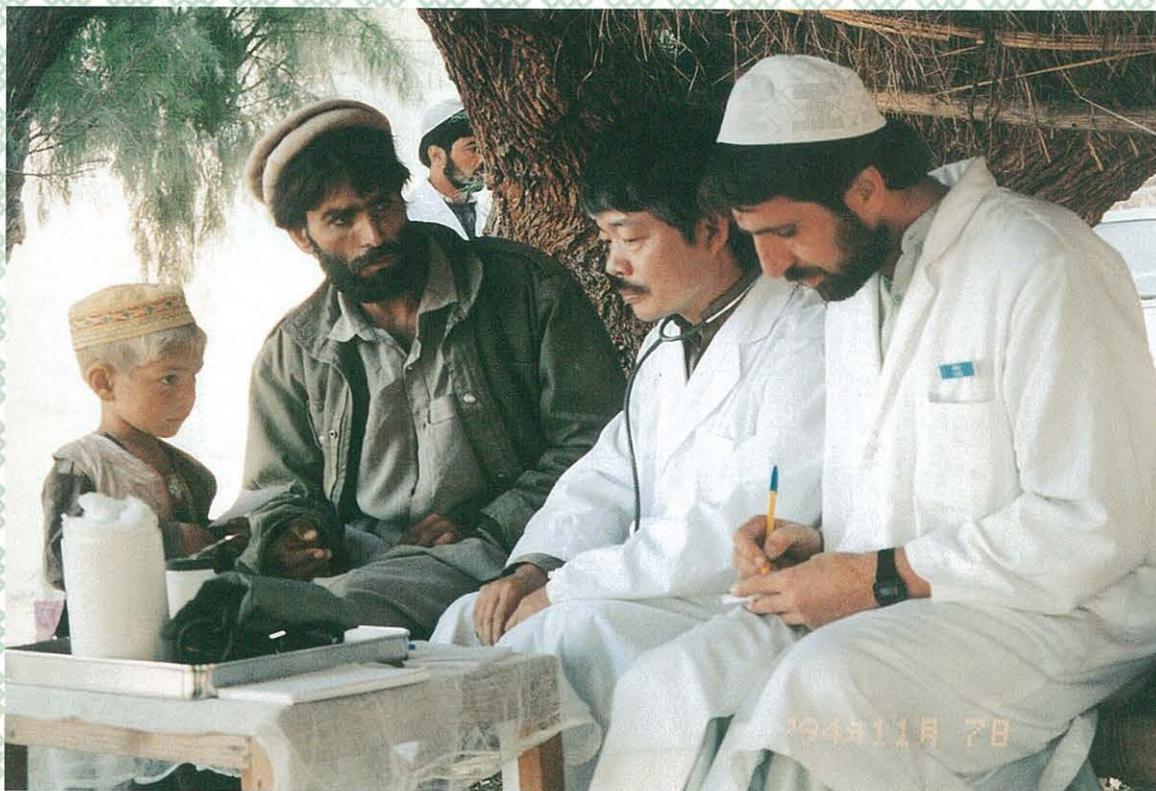
職場紹介（ボイラー室）…………… 32



第42回農村医学夏季大学講座

若月賞受賞記念講演

「国際医療協力の18年」



PMS（ペシャワール会・医療サービス）院長
ペシャワール会現地代表 なかむら 中村 てつ 哲

こんにちは、中村です。本日は私たちが医学生の中からあこがれの的でありました佐久病院と若月先生にこういかたちで招かれることを光栄に思っております。

私たちは現地に行って活動してきましたが、ここには「国際協力十八年」と書いてありますけれども、私たちは特別「国際」ということを意識したことはありません。その地域にたまたま行って、その地域にいざるを得ない羽目になって、そこでできる最大限のことをしてきたということであって、

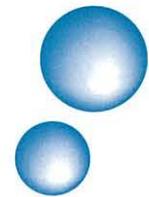
「国際」という言葉から連想するような特別なものはありません。

とは言っても、現地の事情というのとはなかなか日本に伝わりにくいことが多くございまして、いろいろ話すよりも、今日は私たちの「十八年の歩み」をそのままできるだけ正確に述べて何かの足しにしていただきたいと思います。

まず、最近の映像を見ていただいて概要を紹介したいと思います。



なかむら てつ
中村 哲氏
プロフィール



【略歴】

1946年9月15日 福岡市生まれ 55歳
 1973年 九州大学医学部卒業
 大牟田労災病院などの勤務を経て
 1984年 パキスタン北西辺境州ペシャワールに赴任

ハンセン病のコントロール計画を柱にした貧民層の診療に携わる
 1986年 アフガン難民のためプロジェクト立ち上げ 日本・アフガン医療サービス設立
 無医地区山岳部に3つの診療所を設立、無料診療に当たる
 1998年 基地病院PMS(70床)をペシャワールに建設
 パキスタン山岳部に2つの診療所も併せ持つ
 2001年 首都カブールに5つの臨時診療所を設立
 主に貧困地区の無料診療を行う

【受賞】

1998年 外務大臣賞
 1992年 毎日国際交流賞
 1993年 西日本文化賞
 1996年 読売医療功労賞
 1998年 朝日社会福祉賞
 2000年 アジア太平洋賞特別賞

【著書】

「ペシャワールにて」(石風社)
 「ダラエ・ヌールへの道」(石風社)
 「医は国境を越えて」(石風社)
 「医者 井戸を掘る」(石風社)
 「ほんとうのアフガニスタン」(光文社)
 「アフガニスタンの診療所から」(筑摩書房)

【若月賞表彰理由】

氏は、1980年代の前半から、勤務医の職をなげうってペシャワールに渡り、ハンセン病の根絶活動と難民治療に取り組んできた。極度の貧困の中で、医療器具もない中でのスタートだった。80年代半ば以降は、医療活動をアフガニスタンにも広げ、山岳地帯の無医地区に診療所を設置するなど努力を続けている。

日本国内には、氏の活動を物心両面で支えている「ペシャワール会」がある。

今回の同時多発テロに伴う米国の報復攻撃という事態の中でも一貫して現地の住民・難民の立場に立って、彼らの救援策を訴えている。常に弱者の立場に立ち続ける一医師としての献身的努力に共感する人々は非常に多い。



第11回若月賞受賞者(3人)にお祝いし、メッセージをおくる若月名誉総長

医療と水と食料を

ペシヤワール会のビデオから

はじめに

二〇〇一年、テロ支援国家とみなされ国際援助から見放されたアフガニスタン、ここでは些細な病気をきっかけに人々が命を落とします。「ペシヤワール会」は中村医師を先頭に無医地区と化したカブールに診療所を開設しました。史上最悪の干ばつで飢餓が進行するなか、一カ所の水源を確保するプロジェクトを始めました。こうした活動を支え続けてきたのは日本人会員の会費と寄付金でした。アメリカに対する同時多発テロによって再び争乱の渦に巻き込まれたアフガニスタン。「ペシヤワール会」は緊急支援として空爆下、食料をアフガニスタンに運びまし

た。多くの善意を難民にもなれない人々に届ける、それが「ペシヤワール会」の活動です。

パキスタン北西部の町、ペシヤワール

アフガニスタンとの国境までわずか五十キロメートルのこの町に「ペシヤワール会・ジャパン医療サービス」（通称PMS）の基地病院があります。

朝八時、全職員を集めた朝礼で一日が始まります。院長は中村哲医師、一九八四年からこの地で診療を続けてきました。パキスタン人、アフガン人、日本人、民族や部族の違いを超えて共に働いています。一日の外来は三百五十人、ベッド数は七十、この日はハンセ

ン病を患いながら長い間医者にかかることのできなかつた患者の診察です。患者一人ひとりに合わせて義足も自前で作ります。

中村医師とこの地を結びつけた標高七七〇メートルの霊峰テイリチ・ミール。一九七八年、中村医師はテイリチ・ミール遠征隊に医師として同行、医療から見放された人々に出会いました。

難民キャンプで治療する中村哲医師

その後ペシヤワールに赴任した中村医師はハンセン病患者の多い山村無医地区を回りました。戦禍をくぐってペシヤワールに逃れてきたアフガン難民のキャンプでも無料で診察しました。一九九一年にはついに国境を越え内戦の続くアフガニスタンの山岳地帯にもむきます。一番困っているのは砲撃と病におびえながら暮らす人々だと考えたからです。多くの難民



らい（ハンセン病）患者を診察する中村医師
治療だけでなく予防にも力を入れている

がペシヤワール会の活動に共鳴し中村医師と行動を共にしました。中村医師はこう語ります。「人がどつと押し寄せる所は行かない。ハンセン病の分野でも人がしたがらないからするのであって、山中の診療でもみんなが押し掛けていけば我々も行かないのですね。人の行きたがらない所に行く、したがらないことをする。それが一つの方針としてあると思います」と。

アフガニスタン首都カブールに五つの診療所開設

タリバンがまだ実行支配していた二〇〇一年八月の首都カブール、この年この町にペシヤワール会は五つの診療所を開設しました。ここでは民族の区別なく、全ての人を無料で診療、そのため毎日八百人近い患者が訪れます。中村医師は半月に一度の割合でこの地に出向きます。この日生後三カ月の赤



PMSの現地スタッフは二百十五名
日本人スタッフ五名・年間診療数は三十万人以上

ん坊が運ばれてきました。日本でもよくある接触性皮膚炎ですが、

極度に皮膚がただれています。中村医師によると「基礎に栄養状態

が良くないということがあります。

また、衛生状態も良くない。水で洗うだけでかなり良くなるのですが、しかし、いまそれがなかなか

言えない状態であるというのは、水そのものが欠乏しているために

こういふところにも影響がでて

います。早めに手を打てば日本ではこんなことで死ぬ病気ではあり

りませんね」と言います。

一歳半の子どもの急患が診療所を訪れました。四十度の高熱です。

朝発熱し、みるみる意識が薄らいだと言います。この夏流行したマ

ラリアが時に幼い命を奪います。入院設備がないため風通しの良い

庭に運ばれました。日本の病院なら何処にでもある点滴、それがこ

こでは貴重な特効薬なのです。二時間後、この子は意識を取り戻し

ました。「本当に助かった。診療

アフガニスタンを襲った最悪の大干ばつに一千の井戸を掘って挑んだ中村医師とペシヤワール会の苦悶と実践の記録



所のお陰で安心して暮らせる。病気になっても心配ないのだから」と父親はスタッフに感謝を表した。

史上最悪の干ばつで一千の井戸を掘る

この年、アフガニスタンは史上最悪の干ばつに見舞われました。

次々に井戸が枯れたため、かろうじて残った水路に子どもたちが群

がり水を奪い合っていました。このままでは医療活動を続けられな

いとペシヤワール会では二〇〇〇

年七月からアフガニスタン東部の町ジャラバードに事務所を構え、水源確保事業をスタートさせました。現地スタ

ッフは七百人、それを仕切るのは水源確保事業現場責任者

の蓮岡修と日本人の青年たちです。彼等は東部一帯で一千

の井戸を掘るといふ目標をかかげました。そのためには誰

よりも日本人が体を張って働

くことが肝心、こうした姿勢が少しずつアフガニスタンの人々の

る気を引きだしていったのです。

堅い岩盤、二トンもある巨石、どんな危険のある仕事にも挑みます。

殆どの井戸は手掘り、深さ六十メートル以上に達することも珍しく

ありません。

地下水が苦しむ人たちの命をつないだ

掘り初めてから一カ月半、地下六十メートルの暗い砂の中からし

み出てきた地下水、この地下水が
渇水に苦しむ人たちの命をつなぐ
のです。それから一週間後、渇水
の村につかの間の潤い、ポンプア
ップされた豊かな水が子どもたち
の背中に放出され、笑顔が戻った。
事業開始から一年、確保した井戸
の数は六百を超えました。

ペシャワール会はボランティア が中心で福岡に事務局

福岡県福岡市、雑居ビルが並ぶ
この町の一角にペシャワール会の
日本事務局（FARA HOUSE）
E）があります。毎週水曜日の午
後七時ころ二十人程のボランティア
アスタッフが集まります。活動に
共感する人々からの電話、寄付金
の整理、礼状などの発送作業は全
て手弁当。現地の状況が悪化する
につれ仕事量も膨大なものになっ
ていきます。ボランティアアスタ
ッフの松岡由香里さんは、「いろい
ろご寄付いただいているので、活

空爆下のなか日本から緊急の食糧配給
事業として約十五万人に配給



動をご理解していただいている方
が大勢いるのは心強いです」と言
います。事務局の役割は現地の正
確な情勢を人々に伝えることです。
ペシャワール会の広報担当、福元
満治さんは、「現地で何が必要と
されているか、可能な限りそれを
実現していくことだと思っていま
す」と言います。
また、ペシャワール会の事務局
長、村上優さんは「現地の状況は
リアルタイムとかなまのまま我々

に届くわけではなくその温度差は
必ずあると思います。その温度差
をいかに埋めるかということが随
分大事だと思います。僕らは向こ
うのことを知っているようであつて
本当は知らない。やっぱり我々は
ありのままを知りたいし、みん
なに知っていただきたい」と言
います。

日本からの善意の寄付金で 自前の新病院を建設

ペシャワール会の発足は一九八
三年九月、計上費の九五%を現地
活動に費やしてします。現在五千
人の会員をまとめる日本事務局と、
現地の社会福祉法人、PMSで構
成されます。
現地のPMSはペシャワールに
ある基地病院を拠点に、アフガニ
スタンとパキスタンで活動してい
ます。
特にアフガニスタンでは活動目
的である医療活動に加え、水供給

計画、食料配給計画を行っていま
す。

ペシャワール会の歩みの中で最
大の転機となったのは一九九八年
の新病院建設でした。総工費七千
万円のうち日本から寄せられた
善意の寄付金。これにより三十年
先を見据えた自前の病院を持つこ
とができるようになったのです。
検査機器の充実、リハビリプログ
ラムの向上、ハンセン病患者は感
覚神経をおかされ足裏を傷つけて
切断にまでなることさえあります。
そのため、それぞれの足形に合っ
たサンダルをつくります。訓練コ
ースも開設、検査助手や看護助手
の人材育成にも力を注いでいます。
新病院の完成によってPMSは活
動範囲を拡大しました。現在は合
計十カ所の診療所を開設していま
す。二〇〇一年十月ペシャワール
にあるスタッフハウスは緊迫した
空気に包まれていました。アメリ
カがどうとうアフガニスタンに空
爆を開始したのです。

アフガンののちの基金 人間らしい共感と励ましの中で

ペシャワール会は、空爆にさらされ、難民にすらなれず、食料援助からも見放された人々を救うため「アフガンののちの基金」を募り、小麦粉四千五百トンを届けます。これで五十万人が飢餓から救われます。中村医師は「ここに来ればいろいろなことに遭遇する。皆が善人ではない。助けられる人、中には悪いことをするヤツ、人を殺すヤツもいる。そんな中でも何かがある、それでも人間らしい共感できるものがある、そういうものによって励まされてきたということでしょうね」と言う。

十月二十日からトラックが次々と出発しました。同じ人間として虐げられ苦しんでいる人々を見捨てておくことはできません。多くの善意に支えられながら私たちは活動を続けていきます。

講演 18年の歩みを通して 何が見えるか



最近のアフガニスタンの概要を

映像で見えていただきました。食料配給の顛末は後ほどお話したいと思います。ですが、現在は皆さんご承知のようにタリバン政権というのは崩れました。タリバン政権は日本で行われているほど変な政権ではなかった訳ですが、崩壊後は無秩序状態で無政府状態になりました。大混乱の中を数名の負傷者を出して我々は食料配給計画を閉鎖いた

しました。

現在カブールでは、ちょうど噴火口のマグマの上に浮かぶボートのような存在でありまして、外国軍が撤退すれば一週間と持たないだろうと言われています。だからほとんどの「NGO」はカブールに集中してほとんどカブール情報しか伝わりませんけれど、我々の活動範囲の農村部から見える光景と、日本に伝わる光景とは全く

百八十度違うということでした。

カブールからも全診療所を閉鎖してすべて撤退致しました。数日前私が見た印象では、今年の秋おそらく難民が帰っていくのではなくて、帰されている状態がです。もともと飢餓難民として逃げてきた人たちが現地に戻されていくという状態です。飢餓難民の人たちは出稼ぎにきた訳ですから戻っても行くところももちろんない。そのため半分以上は都市にとどまっています。そしてこの人たちはまともな食物もないという状態であふれているのです。

冬を前にして何か大きな出来事が起きるであろうと思います。さらにアメリカ軍の軍事活動はほとんど伝えられていませんが、明らかに拡大の一途をたどっています。この間誤爆が伝えられましたが、それまで誤爆ばかりだったのに何故この間の誤爆だけが伝えられたのかよく分からないのですが、アフガニスタンはとうとうむちゃ

くちやになってしまいました。

こういうことは十年前にもありましたが、いまアフガニスタンで何が起きているかという話よりも、私たちの十八年の歩みを通して何が見えるだろうか、ということをし、医療関係者だけではなくて、一人の人間、日本人として何かを少しでもつかんでいただけたらと思っています。

山脈の国アフガニスタンで

私たちの活動はパキスタン北部のペシャワールという町を拠点といたしまして、アフガニスタンとパキスタン両国にまたがって活動しています。七月現在でアフガニスタンに三つの診療所、これは十年以上運営されてきました。パキスタン側に一つの診療所、カブールからは撤退いたしました。それからペシャワールの病院と合わせて四カ所の診療施設があり、医療スタッフは百五十名、年間診療患

者は昨年で二十九万人でした。現在のアフガニスタンは大干ばつ状態でありましてこれに対しても大きな取り組みを行っています。

アフガニスタンの面積は日本の一・七倍、人口は約二千万人です。これも根拠のある数字ではないですが、アフガニスタンはきちんとした数字がないというのが特徴です。活動の背景をいくつか説明しますと、地理的な条件が日本とまるで異なるということです。アフガニスタンの面積の八割はヒンズークツシユ山脈で占められています。山の国だといえます。このヒンズークツシユ山脈は六千メートル、七千メートルの山がずらりと立ち並び上から見ると美しい光景ですが、私たちの実際の活動はこの山間の谷間をアリのが這うように少しずつ診療圏を拡大しているという気の長い時間のかかる活動です。一番遠い診療地帯で、片道歩いてあるいは馬で一週間かかるといのが普通というところです。

六・七千メートルのヒンズークツシユ山脈



だから何事をするにも時間がかかる、昨日一つの政権が崩れて明日別の政権ができて一年後に総選挙ということは絶対にあり得ません。しかも高い山に隔てられていますから、いろいろな民族が雑居して完結した自給自足の生活を営んでいます。

アフガニスタンは中央アジアの一部ですが乾燥地帯なんです。二千万人といわれる人口がどうやっ

て食べていくかというと、農業、牧畜が大体九割以上でして、アフガン人はほとんど農民です。あの乾燥地帯でどうして食べれるのかといいますと、その源は白い雪です。冬に降り積もった雪、何万年もかけてたまった氷河が夏に溶けだしてきて、川沿いに豊かな実りを約束してくれるということなのです。ヒンズークツシユ山脈一帯に人間も動物も植物もこの水の恩恵を受けて今まで暮らしてきたのです。しかし最近の問題はこの雪が山から消えつつあるということです。地球温暖化がアフガニスタンの大干ばつの重大な原因となっています。

アフガニスタンでは「カネがなくとも食べていけるけど、雪がなければ食べていけない」ということわざがありますが、そのとおりでありまして、願いはとにかく地球が冷えて、干ばつが収まってくれという思いであります。

ヒンズークツシユ山脈の雪はア

フガン人の命です。

イスラム教のモスクを中心に

アフガニスタンのほとんどの人口はイスラム教徒でありまして、各町や村に行きますと、モスク、教会堂があるわけですね。これを中心にして地域の社会生活が回る。日本でいうとさしずめ、お寺を中心にして檀家が集まって一つのムラをつくっているというのに近いわけですね。いろいろなもめ事はだいたいここで解決される。これと連動して地域の自治会があり、地域のことは地域で決定する。自給自足であるとともに、警察もいなければ精神病院もない、という社会です。それがどうして可能かといえますと、各地域が独立した状態でおおかつ全体のアフガニスタンというまとまりをつくっている。この中心となるのがこのイスラム教のモスク、そしてこれと連動するいわゆる長老会と地域自治

イスラム教の教会堂（モスク）



会です。この点が日本人には分かりにくい。

この間まで消費税に反対していたのに、いったん国会を通過してしまつと一億二千万人が全員明日からそれを守るといふ社会ではありません。カブールで何か決まったらとしてもみんなそれを守らない。それよりも昔からの慣習を大切に、という社会なんです。この点がなかなか日本の方には分かりにくいことでもあります。

さらに、貧富の差が著しい。お金持ちはちよつとした病気でロンドンや東京やニューヨークに簡単

に飛んでいくけれど、貧乏人は数百円はおろか数十円のお金がなくて死んでいく。私たちがすれば日本の医療を現地に持ち込んではおもてなしで、やっていけないので、いかに少ないお金でいかに多くの人に恩恵を及ぼすかというところで特別な工夫をせざるを得ない社会であるということですよ。

モノもカネもない中で

私は十八年前、一九八四年の五月に、当時発足したばかりの「ハensen病（らい病）コントロール計画の部を担当して診療施設を充実してくれ」ということでアフガニスタンに行きました。

当時、登録された患者は二千四百人。現地では隔離はせずに、何か合併症があった時だけ入院させ

て帰すということでした。けれども二千四百人に対してベッド数はわずか十六床でした。しかもハンセン病はいろいろな学問と治療の局面が必要な病気です。整形外科、形成外科、神経病学、皮膚病学などいろいろな分野が統合された学問を求められていたのですが、私が赴任した当時の医療器具といつたら、壊れたトロリーが一つ、ガ―ゼを入れるケツテルというものが壊れた。ピンセットが数本、はめると耳の痛い聴診器が一本、注射器といえはデイスポ―ザブルの注射器を何べんも怪しげな消毒水で洗って使うという状態でした。ガ―ゼはどうやって消毒するかというと、金属のボールに詰め込んでオーブント―スターに入れる、煙が出かかった頃にぱつと出す。狐色に焦げていたら消毒済み、白いはまだ未消毒、という状態から始めたのです。この状態に、見た人たちはビクビクすると共に、そこで医療をしていた私に「中村

先生はすごい、感動しました」と言ってくれましたけれど、何も私は皆を感動させるためではなく一人でも患者が治ってくれたらということで一生涯やってきただけです。医療はモノやカネではないといいますが、ある程度モノやカネも必要だということで、ペシャワール会の活動が活発化して現在に至っているわけであります。

現在ではマヒした手足を動かす



十八年前の診療施設 医療器具もほとんどなかった

再建外科だとか、つぶれた顔を治す形成外科も含めて何とかハンセン病の合併症の治療はできるようになりました。何と、アフガニスタン全体、パキスタン北部全体でペシャワール会の運営している病院だけが合併症の治療ができるということなのです。

実際にはハンセン病の治療というの、全体の医療活動のごく一部ですが、医療活動が充実してきたことが分かります。実際に

私たちの活動は一見医療とは関係のないところに大部分のエネルギーを費やしてきたのでございます。

文化・習慣の違いを認めて

現地の慣習でめんくらったのは女性が顔を隠すという習慣です。特にハンセン病の初期症状というのは皮膚に出ますから、男の場合なら服を脱がして皮膚にできた病巣を発

見すれば診断は容易で、治療もその時期に始めますと完全に治ります。ところが女性の発見率が極めて低い。というのは、女性が肌を出して顔を見せて歩くというのは現地では絶対にはないからです。これは昔からの習慣ですから仕方がないので、我々の方からいうと非常に都合が悪いものでございます。このために女性の患者の割合が地域によっては一〇%を切るというところもあります。

そこで外国人が犯しやすい過ちというものがあります。こういう習慣そのものが野蛮である、女性を差別するものである、といった、その地域の文化や慣習に対してこれを、いい、悪い、それから、劣っている、優れている、というモノサシで計ってこれを決めつけてしまうのです。それがために当然現地にはいられなくなって追放になる。ニューヨークやロンドンから来た外国人医者がただそれだけを見て国に帰って行って報告して



女性は肌を出して歩くという習慣がない

も、凱旋將軍で迎えられます。しかし、私から言わせると、私たちは患者と一緒にいなくてはいけないわけですから、外国人はそれでよからうけれど、勝手にやってくれ。しかし、この患者をどうしてくれるのだ、あなたたちは、本当に自分たちが責任を持って診たいというなら連れて帰ってでも診ることができると言いたくない。しかしそれはできないの

です。

やはり人間というのはいろいろな制約に縛られて生きているのでありまして、私たちとしてはこの制約の中にあっても、この患者が最も幸せな状態は何か、ということを考えてそれなりの準備をしておくてはいけないとつねづね思っています。ペシャワール会としては現地の慣習や、文化、風習については一切これを、いい、悪い、劣っている、優れている、という目で見ないということを買ってきてました。

こればかりは外人部隊にたよるを得ないということで現在ペシャワール会から十数年の間にのべ二十名前後の女性ワーカーと看護師さんたち、理学療法士さんがきました。そのために女性のハンセン病の発見率と女性患者のサービスが大きい向上することができました。なかには十二年もいるベテランもいます。こうして私一人で行っているのではなくて、実際

には現地の人々、地味な活動を長くしている日本人たち、こういう人々たちの手によって少しずつ現地のハンセン病の医療状態は改善されてきたわけでございます。

アフガン戦争の残したもの

さらにアフガン問題がありました。いまから二十四年前にソ連軍十万人が大挙してアフガニスタンに侵攻してくる。当時私が赴任した一九八四年、八五年、八六年はアフガン戦争の真つ只中で最も内戦が激烈な時期でありました。ペシャワールというのは国境の町ですけれども別名パシュトゥン人の町とも言われています。現地の多数派民族はパシュトゥン民族でありましてパキスタン側に二千万人、アフガン側にも同数弱が住んでいて、それぞれの多数派民族を構成しています。植民地時代にただ国境線が引かれたというだけで、国境線がなければ昔は国内移動であ

って、あるいは人口移動であって難民とは呼ばなかったのです。とにかく内戦によって六百万人の難民が出る、その半分の三百万人がペシャワールになだれ込んでくるのです。この内戦で死亡した人は少なくとも二百万人、戦闘員だけで六十数万人が死亡しています。これがその当時の数字でしたから現在にはもつと増えているのではないかと思います。ともかく我々は医療の立場からアフガン問題に巻き込まれていったわけでございます。

初めは細々と難民キャンプを回っておりましたが、私たちは方針の大転換をしました。というのは、難民は難民である、やがて帰って行くであろう。それにハンセン病というのは、決して特別な病気ではないですが数が少ない病気なのです。ハンセン病が多い所は同時に他の感染症、例えば腸チブス、マラリア、結核などありとあらゆる感染症の巣窟であることが多いのです。こういった所は山の間の貧しい村々の医療設備がほとんどない所ばかりです。従ってハンセン病だけを診る診療施設では現地では成り立たないということで、ペシャワール会としてはアフガニスタン農村部における無医地区、すなわちハンセン病の多発地帯、ほとんどが山間の農村部ですがここでモデル診療体制を作るんだというのを一つの柱とするようになりました。

先ほどアフガニスタンは数字が当てにならないという話をしまし



アフガン戦争によって倒されたままの戦車



だが、どういう地域にどの位の人が住んでいてどういう病気が多いか全然分からないので、当時は内戦の真っ只中でとても歩き回れるような状態ではありませんでしたが、山を越え谷を越え歩きながら行くしかありませんでした。アフガニスタンでは最も高い山でヌーリスタンという二千八百メートルの地域に行った時に「フランスからようこそ」と言われたんですね。「ドクターはフランス人ですか？」と聞くわけです。今ま

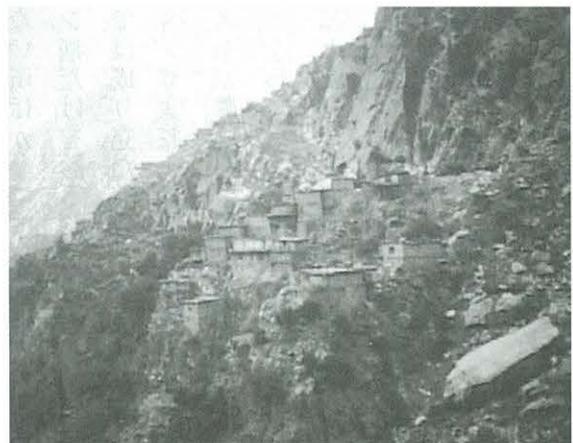
でも中国人か韓国人かと聞かれたことはありましたけれどフランス人はまったく初めてでしたのでさすがにビックリしました。そんなに顔立ちが良いとは思えないのに（笑い）。後で聞きましたらこの地域の人たちは外国人を見るのが初めてだったのです。そのため「あの人はアフガン人ではないようだけどフランス人？」と当てずっぽに言ったとのことでした。それで日本人だと言うと態度ががらりと変わるので。どういうふう

に変わるかというとき非常に友好的になるのです。何故なのか私は良く分かりませんが、日本について連想するのが先ず日露戦争なのです。ほとんどの人たちが日露戦争を知っているのです。それから、ヒロシマ、ナガサキ、この三つはどんな山の中にいる人たちも、どんなに学問のない人でも知っているのです。しかし、日本に対する正確な知識は余りないのです。一つのエピソードですが、お

金を貯めているある人に「何で貯めているの」と聞いたら、「日本に行きたいのだけれど歩いて何日かかりますか？」と聞いてくるのです。この地理感覚にはさすがにビックリしました。中国も近くですから何ヶ月か歩いて行けば着くと思っっているのです。

何が最善なのか

私たちは診療所で診療していても何が出来るだろうかという無力感にとらわれます。アフガンの山中の男たちは険しい谷間を歩き回って数百メートル下の谷川に水を汲みに行っている。そんな山の中に一年後に総選挙があると私は聞きました。住民のなかには「選挙って何ですか？食べ物ですか？」「だいいち選挙管理委員会がどうやってこんな山の中までくるのか」と言う人もいます。一方で外国機関のプロジェクトを見れば見るほどむなしくなるの



です。我々がベシヤワールで立てた計画でさえうまくいかないのに、霞ヶ関やジュネーブで立てられた計画がうまくいくわけがない。しかし、我々としては小さな診療所ですけれど診療して何が出来るだろうかという無力感にとらわれながらも、アフガンの山の中でみんなと一緒に苦労したり喜んだりしながら、何がこの人々にとって最善なのかというのを考えてやっっている段階であります。パキスタン、アフガニスタンの

国境は二千四百キロメートルあって、表向きには閉鎖をしても、いわゆるザルの目なのですね。自由自在に国境を越えて活動しておりました。最初は難民キャンプで診療をしておりました。

ソ連がアフガニスタンから帰りはじめたのは一九八八年で、一九八九年までにソ連軍は撤退しました。その後もアフガニスタンは世界的なトピックスになりました



アフガニスタンから撤退するソ連軍

界中からジャーナリストが押し寄せました。ジャーナリストたちは、ソ連が帰れば内戦が止むだろう、難民も三百万人が一斉に帰るだろうと思っていましたが大間違いでした。難民はだれ一人として帰りませんでした。

アフガン復興があつても盛んに言われました。世界中から二百団体、三百団体の救援部隊が押し寄せまして、僅か二年の間に数十億ドルが使われました。ところがこれによって帰った難民は一人もいませんでした。むしろ内戦が激しくなり、そうこうするうちに湾岸戦争が始まりました。

こういう土壇場になると人間の本性が出てくるものです。あの時に逃げ足の早かったのは、ほとんどの外国のNGOでした。それもアジア系の人を残留部隊にして一斉に逃げ出して行ったのです。湾岸戦争が始まると僅か数日で逃げ行ってしまうということで、事実上アフガン復興プロジェクトは

壊滅しました。

その後、共産政権が倒れました。京の都カブルを目指しているいろいろな政治勢力が攻め上げてきました。そのために田舎の農村部は伝統的な自治統治形態というものが復活しました。大部分が農民であつた難民たちは実にこの情勢をよく読んで一斉に帰っていくということになりました。一九九

二年五月から十二月まで七カ月の間に、二百七十万人の難民のうち二百万人がほとんど誰の助けも借りずに帰郷するということがありました。これはほとんどニュースとして取り上げられませんでした。が、今後も似たようなことがあるのではないかと思います。

それに合わせるように山の中に次々と診療所を開設しました。これが現在でもつづいています。難民を迎え撃つ形で診療所を開設してきました。やはり人間土壇場になると農業が基幹産業でないとつぶれてしまう。アフガニスタンで

端的に分かるわけですが、電化製品やラジオを持っていてもひもじい時は食べれないのです。札束は薪にしかならないのです。やっぱり人間の基本的な営みというのは、農業であるというのがアフガニスタンにいと分かります。我々としては医療の立場から農村の復興に寄与するということが猛烈な活動を開始したわけでございます。

大千ばつにみまわれて

四年前、十五年経った時点で、「先は長い」とても十年、二十年で終わる問題ではなからうということ。で基地病院をベシヤワールに建設いたしました。ここを拠点にアフガン、パキスタン両国にまたがって活動ができるように工夫をいたしました。というのは、話題性が去るとその活動も落ちてしまうというのが国際援助の弱みでありまして、例えば結核が話題になると結核関係者がわつと現れてそれな



りの活動が起きてくる。ハンセン病が話題になるとわっとハンセン病関係者が増えて活動が活発になります。話題性が去ると消えていくというのが私たちの経験でありました。しかもハンセン病というのは患者さんによっては何十年もの付き合いがあるわけです。そんなときに話題性にふり回されてはかなわない、一つでも良いから動かずに、ずっと診ていく診療施設が必要だということではフィール

ドワークのための基地病院を兼ねて七十床の病院を建設したわけでございます。

我々は徹底した現地主義でありまして、日本では任意団体ですけれど、現地では社会福祉法人として現地にとけ込み定着するという方法をとりました。

今からという時にアフガニスタンという国はよほど運の悪い国でありまして、ここを襲ったのがアフガニスタンの人々が経験したことのないような大干ばつでありました。二〇〇〇年の五月、WHOの発表では、現在、ユーラシア大陸のど真ん中にとつともない大干ばつが進行中であるといえます。その範囲は中央アジア全域から中国インド、パキスタン、イラン、イラクまで巻き込むもので、その被害が最も激烈なのがアフガニスタンでありました。被災者は全体で約六千万人で、アフガニスタンでは二千万人の人口の半分以上の千二百万人が被災する。四百万人

がそのために飢餓線上にある、百万人が餓死線上にあるといわれました。私たちの村でも次々と農民たちが村を捨てて逃げていくという状態でした。

また、作物が獲れないだけでなく飲み水もなくては人間生きていけません。飲み水が欠乏してきますと半日がかりで何キロも歩いて水を汲みに行くという光景もありました。こういう状態だと腸管感染症、赤痢だとか、アメーバ症だとか、腸チフスだとかが流行しやすいのです。そのために子どもたちが次々と死んでいきました。農民は家畜だけが唯一の財産ですから家畜が死ぬ前にバザールで売って食いつなぎました。二年前にアフガニスタンの農村では家畜の九割が死滅したといわれています。農業が壊滅的な打撃を受けたのです。

山からも白い雪が消えてゆきました。カブール川はアフガニスタンでは最も大きな川ですが、この

川の水が歩いて渡れる位に干上がったてしまいました。大変な干ばつだったので。このために汚水を子どもたちが飲む、そのために赤痢になって子どもたちが死ぬのです。皆さん、餓死という死の方について、道端でおながすいてバツタリ倒れる死に方を想像されるかも知れませんが、そういう死の方には少ないのです。飢餓状態になってガリガリに痩せて抵抗力が落ちる。そこでちょっとした病気



干ばつのために汚水でも飲む子どもたち

で命を落とすというのが一般的な餓死の在り方です。そのために子どもの犠牲者が多かったですね。外来で子どもたちが待っている間にお母さんの手の中で体が冷えていくということも普通に見られました。

私たちとしてはこういう状態はとでも診療を続けられるものはありませんでした。

水を求めて井戸を掘る

人が来なければ診療もなにもありませんし、医者がこんなことを言っただけではありませんが、病気がこころではない、当たり前ですが、まぎず生きていなければ病気も治せない。村人を総動員して「先ず清潔な飲料水の確保を」ということで、二〇〇〇年の七月から井戸を掘る作業を始めました。

井戸を掘るに当たっては、現地でも掘る技術はありますが、大きな岩盤に当たった時にこれをどう

やってくりぬくかという技術はありませんでした。しかも乾燥していますので、どんどん水位が下がっていつてしまうのですが、その水位を追いかけられるようにして井戸を掘り続けなければなりません。この井戸掘りは現在も進行中でありまして八百八十カ所の作業地を抱えて、七百カ所で水を得ています。このために約二十五万人が村を離れずに住んでいるという事態にまで至りました。



七百カ所の井戸を掘り二十万人の人々の水を確保

今は撤去した地雷を利用しています。岩盤にぶち当たった時にどうするかというと、ドリルで穴を開けてこの地雷の火薬を入れるのです。これは強力なものですから爆破すると大抵くり貫けました。

実際は地雷はほとんどの村で羊や山羊を歩かせて撤去されています、危険な地域は誰も近寄らないので地雷による犠牲者は激減しています。私たちの職員の多くも元ゲリラですから爆薬物の取り扱いには慣れていまして、これを平和利用させていただいています。

川沿いの村々では五メートル口径の大きな灌漑用井戸を掘って汲み出すということでさらに緑地化も広げました。二十メートルまで掘れば必ず水が出るという確信のもとに去年掘りました井戸がやつと水が出ました。

この一本の井戸で約百ヘクタールが灌漑できるということで、砂漠化した地域ではこれを中心に緑化が進んでいます。

やってきたのは援助でなく制裁

さらにご存知のように国連制裁が始まりました。アフガン人にとっては何のことなのか分からないのです。そこであのころ私たちが思っていたことは、こんなに大変なことが世界に伝わらないはずがない、あの一人も帰らなかったアフガン復興援助でも数十億ドル使ったわけですから、こんなことで人が来ないはずはない、と待つていましたら、やってきたのは「国際援助」ではなくて「国連制裁」でした。それも何と初めうちは昨年一月、食料まで制裁しようとしたのです。皆さんがこの会場で何日も食わずに飢えている時に、外からの人が「この会場に食べ物を入れるな」と制限をするのと同じでありまして、アフガニスタンはこれによって決定的に孤立したわけがあります。

その後は、ニューヨークのテロ

事件をきっかけにして、どうもアフガニスタンというのは初めから狙われていたとしか思えないのですが、その数日後から突然、ウサマ・ビン・ラディン、タリバン、アフガニスタンというのが現地のニュースに飛び込んで来るようになりまして空爆が始まりました。

あの冬に差し迫った時期に空爆を開始するというのがいかに犯罪的であるかというのは、アフガニスタンを少しでも知った人なら誰でも分かっています。

生きて真冬を越せない人は一割を超えるのではないかということ、私たちは命の基金というのを募って物資を送ったのでございます。四千五百トンを予定してまして千八百トンしか送れませんでした。これによって十数万人の人たちが飢餓から救われたということでございます。

国連制裁によってカブールから診療所が消えてしまう。私たちのスタンスとしては都市部の診療と

国連制裁によってカブールから診療所が消え、臨時診療所を開設



Quala-e-Zaman Khan Clinic

いうのはほとんどしませんでしたけど今度ばかりは例外だということでした。あの巨大な百万都市がほとんどまともな診療所がないという状態になるので、昨年三月臨時診療所を開設して今年の六月まで一年二カ月運営されました。さらにカブールは乞食の女性で溢れる状態でありましてとても綺麗事ではすまされない、おかみさんたちにとっては明日何を食べて

いくかということが最大の課題でありました。

ところが皆んなが飢えて明日どうやっていこうかというところに鉛筆とノートを配りに来る、サッカー場を作りに来る。ひどいのは、干ばつで水不足のために一日かけてロバの背中に水袋を積んで歩いてその地域に、外人用の娯楽用プールを作るということまでありました。

こんなことが許されていいのかと怒りを感じました。私たちとしてはとにかく胃袋を満たすことが先決だということでした。

カブール市では鉛筆とノートによる教育という綺麗事ではすまされない問題がありました。第一自分の国の教育すら満足にできないのに人の教育まで言えるのかと私は思います。先ずおかみさんたちの胃袋を満たすこと、それも自分の手で稼いで満たすこと。女性自立のワークショップというのも一時的に開かれました。

自給自足の村を目指して

さらにタリバンが壊滅すると同時に復活したのは、無秩序と、麻薬栽培の自由、内乱の自由、餓死の自由というのがアフガニスタンの現在の状態でございます。きれいな花が咲いている畑があります。ケシ畑です。政権が変わると同時に盛大に復活いたしました。昨年までのタリバン政権下ではほとんど見ることがなかった光景です。それが自由化されてしまうとあつという間が変わってしまいました。これが本当に自由だったのかということですね。

診療所の周りは麦畑がありました。そこだけはケシは作らなかつたのです。というのは、住民たちとは密接なつながりが十年以上もありまして、我々はケシが嫌いだということを知っているわけです。そのためにケシを作るとドクターたちは逃げていくだろう、という

ことで住民はケシは作らないという約束をしました。これはジルガ（長老会）とって地域の権力の最小単位ですが、各村のジルガと取引をすることで診療所の所だけはケシができなかったわけです。

ある程度の福祉が行き渡ること、これがケシを絶滅する唯一の方法でありまして、力づくでは貧乏の中で「栽培するな」と言っても無理なのです。これは一つの実例ではないかと思えます。さらに、砂漠化した地域に私たちが意図しているのは緑化を広げると同時に、大量の水が利用できませんから乾燥に強い作物を生産し農業生産量を少しでも上げようと努力しています。

土壌の改良から地味な仕事がつこつと始まっています。それから畜産関係では牛の九割が死んでいますので地域を限定してモデル地域で積極的にやろうということ、現在、農業指導員が現地に入りましてまだ立案の段階ですが始

めました。その指導員に「あとの位かかりますか」と聞くと、「いやあー、最低あと十年は見ておいた方がいいでしょう」という話だったので、長い取り組みをしながら少しでも豊かな村を作つて、そこで人々が自給自足できるように村を目指して現在やつと試みが始まったばかりです。

人間にとって必要なものとは

いつも講演の時に見てもらうのですが、カプールの人たちはいつもみんなが暗い顔をしているばかりではないんです。見たところカプールに来た日本人の方が暗い顔をしているのです。助けられる方がニコニコしていて明るい、かといって彼等は困っていないわけではない。冗談に「もう少し募金の集まりそうな写真を撮ってください」と言われたことがあります。困った顔には滅多にお目にかからないのです。国際団体のポスター

で、やせこけた子どもを抱いていかにも哀れそうな惨めな写真がありますが、確かにそういう場面もないことはないですが、大体向こうの子どもたちは明るいのです。これは何故なんだろうかと考えたとき、確かに何も持たない人の明るさ、楽天性というのはあるのではないかと思うのです、私たちはえてして何が手に入ったら、こういうものがあつたらと思いがち



いつでもニコニコ明るい子どもたち

ですが、そうではなくて、何も持たない楽天的なものがあるのだということを知りました。モノを持つてば持つほど皆んな顔が暗くなってくるのです。日本で不況が、不況がと言っています。私は最初、意味が分からずに「その不況でいったい何人餓死しましたか？」と聞きました。餓死者はいませんが、その代わりに自殺者は増えていると言っています。三万人以上が死んでいると言います。これはどういうことなのかアフガニスタンではよく分かりませんが、アフガニスタンの私たちの仕事を通して、今十八年間を振り返って見るときに、決して何か向こうのためにしてあげたという感じはほとんどないのです。この仕事を通じて「早くこんな所から帰りたい」などと思うと何か問題が出てくるのです。宮沢賢治の本に「セロ弾きのゴーシュ」というのがあります。「こんな大事な時にこなくてもという時に、ネズミが現れたり、タヌキ

が現れたりして、嫌々ながらも世話をしてやる、そのうちにオーケストラで上手にチェロが弾けるようになる」という話がありました。けれど、それに似たようなものでありまして、今振り返って見ると、助けに来たつもりで助かったのは自分たちではなからうかと思うようになったのです。

日本中がテロ戦争だの、復讐戦だのと言ってワアワア言っている時に、私は事実を言うことができずして、そしてアフガニスタンでの経験を通していろいろなことが分かるようになりました。私たちの活動が人間にとって必要なモノは何なのか、必要でないモノは何か、真剣に考える時期にさしかかってきたのではないかと私たちは改めて思っています。

一つの破局の始まり

私は予言者ではありませんが、このアフガニスタンの爆撃は何か

の終わりの始まりだと考えざるをえないのです。その終わりが何を意味するのか、いつ頃くるのか、私はよく分かりませんが一つの世界はもう既にいきづまった。次ぎに何か出て来るであろう。そのための一つの破局の始まりが始まったと言って差し支えないと思います。ただし、騒々しく終わって欲しくはないというのが願いです。

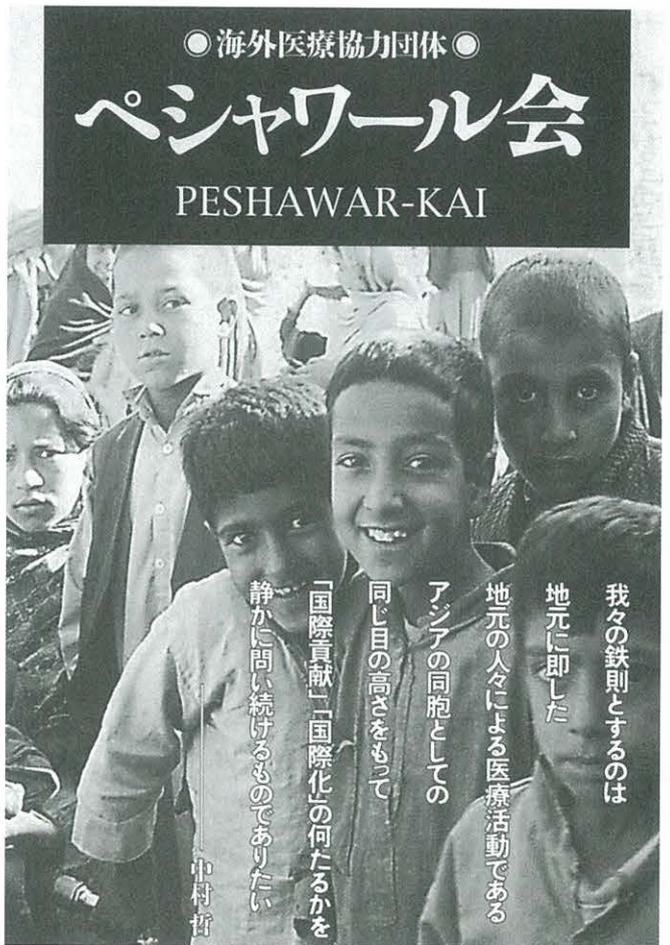
私としては、何が真実で何が真実でないか、何を捨てて、何を捨てるべきでないか、日本中、世界中が考える時が来たのではないかと思っています。

質疑応答

司会者

行天 良雄 先生

中村先生ありがとうございます。世の中には「百聞は一見にしかず」ということわざがあります



が、なお、近頃は「十見、つまり十を見ることは、一つの行い、一行にしかず」と言う言葉がついて回っていますが、先生は文字どおり百聞を一行の中で全部集約してくださいました。

実際に十八年のたくさんの体験をされたお話、これからをもっともっと続けていこうというお話、これからでも予言してくださいませのお話をいただきました。

中村哲先生は、同時多発テロの

関係で急にクローズアップされて、いわば「時の人」というような表現があります。グループの人たちは「バカボンパパ」というあだ名を付けていますが、スタッフの方とも非常に仲良くやっています。飄々として自分の信ずるところをやっている感じがします。しかし現地ではいろいろな話に入り込んだ時には、もうまったく人が違ったように厳しい環境になるのだというお話を伺いました。

本当にありがとうございます。せつかくの機会ですので中村先生にお聞きになりたいことがあります。したら質問をどうぞ。

質問

東京のJ A 共済総合研究所で研究員をしています。

大変貴重な話をありがとうございます。日本やアメリカの報道ではされない、知ることのできな情報をお聞きしたいので良かったと感謝します。

二点ほど伺います。
一点目は、ペシヤワール会の運営資金についてですが、ODAとかWHOの関係から補助を得て運営されていますか、基金だけで運営されているのですか。

二点目は、タリバンが崩壊してちよつと「傀儡政権」みたいなものができていますが、果たして少数民族だけで新しいアフガンの方向に彼等が自分たちの基地を築いてやっていくことが可能なのでしょう。

ようか。見通しなども含めてお話を聞かせ下さい。

中村 哲先生

非常にいい質問だと思います。

一点目の、ペシヤワール会の運営資金は、とても信じられないと思いますが、年間の資金が約一億円です。そのうちの約八割から九割が会費で賄われています。私たちは任意団体です。

NPOなどの法人組織にしますとその法人の維持にすぐお金がかかるのです。例えば書類の提出を求められる、悪いことをしないように国は監視をするのです。そのため特別に人の雇用が必要になりますので現地に送るカネがなくなる。

そういう法人組織が問題になったことがあります。ある著名な国際団体なんかは九割近くが運営費に使われています。皆さんが百円募金しますと十円が現地に届くだけという団体もあるのです。

我々としては九五%と簡単に言うけれど、これを維持しているのはボランティアの力なのです。一億円といえどもほとんどが会員の寄付であるということです。ちなみに昨年は二億円近くの寄付がありました。先ほどの農業計画、食料計画については約七億円の寄付がありました。これが我々の運営資金でございます。

二点目の、カルザイ政権の行方ですが、少数民族、マイノリティがマジョリティを支配することは絶対できないと思います。

私は東部ですと地上から地下から眺めておりますが、先ず現在の状態というのはそう長続きはしないだろうと思います。

いくつか条件があつて、第一に、現在の国際治安維持部隊はカブールに五千名いますが、これが引き上げる時期か、或いは弱った時に何かが起こるだろうと思います。

それから、アメリカ軍の軍事活動は今も地上戦は拡大しているの

ですが、さらに拡大して、何もペシヤワール会を追いかけなくもないのに我々の作業地に出没して集結しているのです。これが誤爆を繰り返したりして現地の人々の恨みを買っています。今誰がアメリカ兵を狙撃しても不思議はない状態です。

これを現地の皆さんに言わせると「今はちよつと黙っている」ということなんです。何を意味するかというと、「いずれはやる」ということなのでですね。反米感情は非常に高まってそれが極限まできた時に爆発するであろうという状況です。

それと教育問題です。外国のNGOを介しているいろんな風俗が入り込んで現地で嫌われているのです。この間北部で暴行事件がありました。日本では普通ですが、女性性がノースリーブで歩いたりすることはアフガン社会では「私を犯して下さい」ということに近いのです。例えば繁華街を女性が水着

姿で歩くのに近いのです。外国人のために荒らされたという意識が現地にも根を下ろしているのです。

それからタリバンは本日に数日にして消えました。数千人が捕らえられたり殺されたり、キューバに送られたりしましたが、ほとんどはサツと消えてしまいました。ということとはサツと出て来るとい

タリバンといっても私は付き合いは長いですが、普通の真面目なイスラム教徒なのです。一部にもちろん宗警察なんかがあつて、うるさいことを言っていました。タリバン自身がそれを笑っていたということがありました。

タリバンというのは、アフガン農村のエッセンスのような勢力です。何か形を変えて出てくるであろうと思います。

それから今の政治家となった人たちは品がないんです。この政権では汚職だらけになってやがてつぶれるだろうという感じ。一

般の民衆はあれはアメリカと一緒にになった国賊であるという言い方をしています。そういうことを考

えますと、カルザイ政権の行方というのはおそらく南ベトナムと似た経過をたどるであろうと考えても良いのではないかと思います。兵力を投入すればするほどムダ使いになって犠牲者も増えていくであろうと思われま

質問

愛知県で社会福祉協議会の職員をしています。

中村先生は、地域慣習に対する態度、相手国の方々の慣習に対する態度を、正しい、正しくないの判断をしない、優れている、劣っているの判断をしないということが大事だということを言われました。

私も仕事がするときにいつも一番陥りやすいことだと感じています。その点を戒めるために

う一言お願いしたいと思

中村 哲先生

これはよく考えて見ると日本国内にもあるのです。違いを認めない、自分がいいと思

て、その上で共通のもので、人と人が結び合うべきではないかと思

至近の早い例では、家庭にしても夫婦にしても、食事の味から好みが違うわけですから、どつちの

いじめにしても、健康人でない部分があるというので違うように見

質問

学生です。

中村先生が山岳部の診療所に行かれた際に、大きな無力感を感じられと言

中村 哲先生

無力感という用語が、どうしたらいいのかわ

しかし、考えてみると「こうしたらいいんだ」と

乗り越えられない時は乗り越えなくてもいいので

必要はなかった

えると良くないのです。その地域の流れに任せる、そこで生きていく人々にとって何が最善なのかを一つひとつのケースで見て、そこで最善を尽くす以外にないのです。何もかも自分の思うようにしないとあなたたちは幸せにならないと



司会者の行天良雄先生の紹介で中村先生へのお礼を述べる早川一光先生
TBSテレビの報道特集の取材も来ていた

いう着想ではダメなのです。

あの山の中で暮らしているという制限がありますが、希望のないところに未来はないのです。ちょっとモノが欲しいだとか、贅沢がしたいとか、カネが欲しいとかいうことで動き出すとダメになって行くということなんです。

簡単なようでむずかしいです。

何が人間にとって大切なのかということとを制限付きの中でも考えていくということだと思つていきます。

行天 良雄先生

そろそろまとめなくてはいけない時間になりました。私がつまとめるよりも、今日の農村医学夏季大講学講座には早川一光先生がいらっしゃっ

ていますのでまとめさせていただきました。と思います。

早川先生は京都の西陣でいわゆる訪問診療、往診をした日本の国内での医療のあり方を実践された先生ですけれども、場所がアフガン、パキスタンと違いますが求められたものは伺っていますとほとんど同じような気がいたします。

早川先生申し訳ありませんが二分くらいで何とかまとめて下さい。

早川 一光先生

中村先生がこの度若月賞を受賞された本当の姿が良く分かりました。中村先生は十八年間アフガニスタンの皆さんのために全力を傾けておられますが、今考えますと六十数年前、佐久で農民のために、病気にさせないように、早期発見と治療、研究に尽力された若月先生の軌跡そのままを中村先生がおやりになつているように思います。よく分かりました。

いまの日本の農村部ではまだア

フガニスタンのような状態で苦しんでおられる農民の人たちも必ずしも少なくありません。その現実には本日ここにお越しの皆さんもご存知だと思えます。

皆さんがこの大学講座終了後にそれぞれの地域にお帰りになりましたら、自分はアフガニスタンにいるようなつもりになって、中村先生の歩んでおられる道を参考にしながら、どうぞ地域の皆さんのため頑張つていただきたいと思います。

これが私のメッセージです。

行天 良雄先生

ありがとうございます。中村先生永い時間本当にありがとうございます。先生が訥々とお話いただいたことが、今日お集まりいただいた人たちに非常に強い何かを残されたと思います。

お忙しくてお疲れのところ改めてありがとうございます。

(拍手)